

国語科教材における アイデンティティの問題圏

——藤野可織「アイデンティティ」を読むための視点——

秋吉和紀

1. 目的と動機

本稿は、主に中・高等学校の国語科の授業で扱われる教材を中心に、そこに表れるアイデンティティの問題の整理を試みるものである。また、その整理をもとに「文学国語」の新教材として採録される藤野可織「アイデンティティ」がどのように分析できるかを提案したい。

本論を始める前に、以下、三つの方向から今回こうした提案をするに至った経緯を述べたい。

一つ目は、「教材」である。これまでも近現代文学を中心に「自我」、「自己意識」、「アイデンティティ」¹⁾というテーマを内包する国語科の教材は数多く存在したが、近年新たに採用された新教材においても「アイデンティティ」というテーマは変わらず扱われている。今回扱う藤野可織「アイデンティティ」についても、高等学校の「文学国語」の教材として桐原書店『探求 文学国語』（文国711）、明治書院『精選 文学国語』（文国707）に採録されることが決まっている。また、中学校教材においても三崎亜記「私」が、教育出版『伝え合う言葉 中学国語3』（国語903）に2016年から掲載されている。両者のタイトルが示す通り、国語科の教材に「アイデンティティ」や「自己」というテーマが、以前にも増して前景化してきている印象を受ける。

二つ目は、「学習者」である。進路選択を迫られる中等教育段階において「アイデンティティの危機」や「アイデンティティの不在」というべき事態は、今も変わらずに存在している。加えて、疫禍の状況下で所謂「おうち時間」によって自分と向き合う時間が増す中で、そうした問題は、よりいっそう学習者に深刻なものとして迫っている。

三つ目は、「授業者」ないし「授業実践」である。進路選択の最中にある学習者に対して、授業者は「ありたい自分」、「あるべき自分」とは何かを問いかける場面が多い。こうした指導は時に、うまく進路決定できない学習者に対して抑圧的な働きかけとなることもあるだろう。

そうした授業者の「アイデンティティを確立せよ」との「教育的」メッセージは、ともすると国語教育の実践における「教材観」や「指導観」とも手を結ぶことがある。近現代小説の登場人物の姿を現代の「常識的」な視点から眺め、社会的に評価されるようなアイデンティティを登場人物が獲得できなかった「自我の失敗の物語」と結論づけるものが、現場の実践では少なくはない。

そこまで明確な「教育的」意図がない実践には、また別の問題が生じている。様々な授業実践における指導観や指導のねらいを見ると「自己を確立する／させる」、「自己と向き合う／向き合わせる」との文言は少なくなく、また、教材観においても「自我の問題を扱った」という旨の記述が散見される。しかし、そうしたものの多くが「自我」や「アイデンティティ」という言葉の具体性に欠け、実際に行われる授業の中で、「自我」や「アイデンティティ」のどういった側面を捉えたいのか、不明瞭なことが多い。

こうした国語教育とアイデンティティを巡る教材、学習者、授業者の状況を目の当たりにし、国語教材に表れる「アイデンティティ」の問題の整理を試みるに至ったのである。

2. アイデンティティ概念の概略と整理

「アイデンティティ」の問題を整理するにあたり、まずはその語義を確認することから始めたい。「identity」は「同一性」を意味する言葉で、論理学上は端的に「 $A=A$ 」で表されるような「同一律」をさすものである。この語はラテン語 *idem*（同一のもの）に由来すると言われている。

そもそも「同一性」の議論そのものは、「自己の認識」等の認識論的問題に留まらず、論理学や意味論の主題でもあり、更には、形而上学全般にわたる問いである。そのような包括的な問題を、E・H・エリクソンが社会学、心理学的な文脈で「自己の認識」の問題として再定義し、現在では「アイデンティティ」は「自己同一性」との語用が一般的となっている。

(1) 「アイデンティティ」の語義に従って

その言葉の通り二つ以上のものの間に「一致」を見ることが「アイデンティティ＝同一性」という言葉の本来の意味である。それを踏まえると、「自己同一性」は、「私」が、自分の外側にある対象や情報を取捨選択するなかで、「これが私だと思えるもの」を自己に同定する（アイデンティファイする）営為であると言える²。「私」と何とが一致するのか、という観点に従って、おおよそ以下のようにまとめた。

① 「私」と「大なるもの」（共同体、価値、主義、思想、宗教）との一致

この①に関しては、文脈によっては「帰属意識」とも訳される。換言すると、これは「私」という個的な存在が何らかの類的な存在との一致を見ることである。

前近代的な世界観の中では、自分の生まれ育った共同体、階級、家柄等々、自身の自己同一性を保ってくれる存在基盤は自然なもの、所与のものとして存在していた。しかし、前近代的な封建制や共同体が歴史的な過程の中で解体されてからというもの、人々が「自分とは何者か」を規定する確固とした基盤を見つけ出すことは難しくなった。私たちを規定するような明示的でわかりやすい「神話」や「大きな物語（大文字の歴史）」はことごとく相対化されたため、私たちがクラス・アイデンティティ（集団的アイデンティティ）という形で自己を規定することは困難になっている。近代以降、そうしたクラス・アイデンティティを支える基盤であった国民国家も、現在ではその不正や欺瞞が明らかにされ、我々の帰属意識（＝クラス・アイデンティティ）を強固に規定してくれるものではなくなった。「多様性」全盛の現在にあっては、かつてのような「大なるものとの一体感」という形からはスケールダウンし、「〇〇のチームの一員である」や「〇〇の学校の一員である」といったかたちで、「コミュニティの連帯感」を示すものとなっている。

この①は、芥川龍之介「羅生門」の「下人」に当てはまるのではないかと考える。主人に暇を出された「下人」。帯刀した彼は、当初は、自身の中に内面化した「正義」をもとに老婆の行為に憎悪を抱いていた。しかしその後、老婆の「論理」を耳にし、その言表行為を自身のものとして内面化することによって「下人」は「生」の「羅（あみ）」に絡めとられる。ちなみに、この話の主人公に「従事」や「隷属」という意味を帯びる「下人」との名が付されていることは興味深い。「下人」は、当初抱いていた「正義」にしても、老婆の言表行為を通して内面化した「悪」にしても、その論理に隷属することによって自身の行動指針を得ている。つまり「下人」という「subject（主体）」は、ある価値言説の「subject（隷属者）」なのである。

② 現在の「私」と過去の「私」との一致

この②は言い換えれば、時間という観点から見た自己の一貫性³のことである。精神分析や社会学の分野で「自己語り」、「ライフヒストリー（自分史）」、「ナラティブ」という術語を目にするが、これらは、この②の意味でのアイデンティティに深く関係するだろう。「いま・ここ」の「私」という主体の安定性を保つために、「語り」を通して自身の存在の輪郭を「象ろうとする行為」（語りの象り）は、言い換えれば、現在の立ち位置から過去の自分と現在の自分との一致を図る行為である。過去と現在との一致が見られない場合、「私」の

起源の不在や「私」の（非）連続性といった問題が生じてくるだろう。

この②の論点を内包する教材としては魯迅「故郷」を挙げたい。「故郷」における「私」は、二十年の時を経て帰郷する。しかし、そこで目の当たりにした故郷は色あせ、かつての美しかった光景をとどめておらず、そこに住む人々の姿も荒廃していつている。かつての友人、閩土とも二十年の時を経た今は、お互いの間に階級の差を感じさせるものとなり、昔の親しい関係は失われてしまった。

このように、幼少期の「私」と今の「私」との断絶が、作中では何度も語られる。作中で「私」は、次世代の「新しい生活」という「希望」を物語り、時間的な非連続性と階級的隔絶とを、未来に託すことで解消しようとしている。

③ 「私」と「身体（活動）」との一致

③は法的人格や法主体に対する帰責性の問題と深く関わるものである。ある者に対して法的な責任能力を問う際、当該の人物が、自身の行為や発言に対して、「それは私の行為・発言である」と認知できる力を有するかどうかが重要になる。別の言い方をすると、法的な場面での帰責性（imputability）とは、ある行為や発言が誰の意志（それがたとえ「未必の故意」であったとしても）を介して行われたか、その出発点である主体を認定することである⁴。これは、意志を介して「私」と「行為・発言」を同定するものである。

この観点には「身体の所有」の問題も関係している。行為や発言を具体的な形にするのは「身体の活動」である。デカルトの心身二元論に起源を持つとされる西洋近代の身体観は、人間の精神活動が物理的な身体をコントロールするという考えを基本にしている。近代法の法的主体にはそうした西洋近代的な心身論が通奏低音として響いている。

私たちは、身体活動の全てを統御できるわけではなく、時には身体に裏切られるということを経験的に知っている。自分の意志に従順だと思われる身体は、実際のところ、「私」の発言や行動の統御を阻む可能性があるものだ。更に、「私」の発言や行動の統御を阻むものは「身体」だけではない。「身体」以外には「無意識」もそうした統御を阻む可能性を有するものである。身体や無意識など、「私」は「私」の内に、自分の意志ではどうにもできないような部分を抱えている。こうした「私の内の他者性」と呼べる問題も③の観点は孕んでいる。こうした「身体所有の不可能性」に関する問題については、鷲田清一をはじめとする哲学（研究）者の評論（論理）教材で、数多く触れられている。

(2) 小括 主観と客観との一致

大まかな区分であるが、以上の三つが「一致」という観点から見た区分である。「私」と

「私以外」のものとの一致を図るという点で、これらを大きく括れば「私」（主観）と「客観」との一致ともいえよう。

こうしたあり方は、ヘーゲル哲学における「対自的（für sich）」な自己のあり方に重なる。ヘーゲル哲学の言葉を借用すれば、まだ他者との対決を知らず、反省（reflexion）の契機を欠く「即自的（an sich）」な状態から、自己の存在理由を求めて対自的あり方へと移行するのが、言わばこの「アイデンティファイ」の過程だと言えるだろう。

やや具体的に言い換えよう。「私」という主観は、主観の外部にある「客観的事実」に常にさらされる。人間関係に限定して言うなら、自分以外の人物の評価や承認に常にさらされるのが「私」という存在である。「私」が行った行為や発言は、他者を媒介し、承認や評価という形で「私」の元に戻ってくる⁵。そうした評価や承認を参照しながら、「私」は自分自身の自己像の修正を行うのである（あるいは、参照せず他者の評価や承認を捨象し、自己像を統合するのである）⁶。一般に「成長」と呼ばれる過程は、客観的な事実や対象を媒介とし、「反省」しながら自己像を更新するこうした運動のことを指している。

さて、以上に試みた整理は、見方を変えると「近代的自我」を成り立たせるための方法を確認する作業とも言える。次に触れる藤野可織「アイデンティティ」は、そうした「近代的自我」が形成される姿を、カリカチュアとして写しとったような物語である。

3. 藤野可織「アイデンティティ」を読む

「アイデンティティ」という題が冠せられたこの物語は、先述したような「アイデンティティ」獲得の諸側面が、複合的に折り重なった作品だと言える。先述の区分のうち、順番が前後するが、まずは「私」と「身体（活動）」との一致という観点から、この物語を眺めてみたい。なお、本文からの引用について「引用1」から順に番号を付けている。また、下線については、議論の必要上、稿者が付したものである⁷。

(1) 「私」と「身体（活動）」との一致という観点から読む

次に示す「引用1」は、「人魚たち」の様子を描く箇所である。

引用1

吊されている人魚たちは、それに見向きもせず、日に日に人魚たる自覚を深めていく。柿洪が馴染むにつれて身は締め、猿部と鮭部をつなぐ糸はぎゅっと食い込んで境目の処理はますます目立たなくなった。顔は伝説の怪物にふさわしく、厳めしくおぞましく、思索的なものへ変化した。人魚たちは、かつて生きていたころ、力強く身をく

ねらせ、荒波を尾で叩いて泳ぎまわったことを思い出すまでになっていた。網と鉗を
持った人間たちに追い回されたことも思い出した。

「引用1」において注目すべきは、人魚としての自覚を深めた結果、かつて猿や鮭だった頃には経験したはずのない「人魚の身体的イメージ」を獲得していることである。言うなれば、人魚たちは、身体の自然的で本来的なあり方からは離れ、「人魚」というイメージに即して作られた観念的な身体を獲得しているのである。これをもとに考えれば、以下の「引用2」の「死んでいる」という言葉の意味の二重性が浮き彫りになる。人魚工場の場面の描写である。

引用2

そここの作業台で、板敷きの床に直接あぐらをかいた職人たちが、「ほら、人魚だ」「そら、人魚だ」とやっている。こうして、人魚たちが生まれる。はじめから死んでいる人魚たちだ。

ここでの「死んでいる」とは、まずは「猿」や「鮭」の直接的な生命の終わりを指してようが、それと同時に、それらの身体が前反省的な自然の有機的な連関から隔絶され、何ら実体のない「人魚」という観念的な身体に組織化されてしまったという事態をも指しているよう。

さて、これに対し、人魚としての自覚もなく、それ故、人魚の想像的（＝観念的）身体も獲得していない「それ」は、かつて猿や鮭であった頃の身体感覚を有し続けている。切断されてもお感じ続ける自然との一体的な快楽を、語りは「それ」の視点に寄せ「完璧な生」と記述する。

引用3

猿であり、鮭であったとき、それは誰かを失望させたことなどなかった。なぜなら、その猿もその鮭も、そもそも期待されることがなかったからだ。その猿、鮭は、他者からの期待なしに生きていた。おのれのやるべきことはちゃんとわかっていたし、し
ぜんとやるべきことをやっていたから、生きていたのだ。あれは、完璧な生だった。
あれに比べたら、この生の不完全さといったらどうだ。

引用 4

マイルズが持ち替えるたびに、それの体の端々が陽光でぬくもった。猿であり鮭であつたころ、日の光のあたたかさは最高の快樂だった。警戒を忘れて地面の日だまりに寝そべったし、きらきら光る川面に留まったものだった。日の光は、命の危険とひきかえにしてでも浴びる価値があった。あの完璧な生、そしてこのあまりにも不完全な生。

「完璧な生」と「生の不完全さ」という対比は、世界内存在として前反省的に自然（世界）に内属している身体と、そうした一体性から切り離され対象化された身体とを峻別しているかのような表現である。

猿の半身と鮭の半身をつなぎ合わせるという人魚の作成法、またその「継ぎ接ぎの身体」が人魚の自覚を得た意識によって制御しようという描写は、デカルトの心身二元論や機械論的自然観、そして「自分の身体は自分の意のままに操れる」という私たちの素朴な身体観に対する皮肉として読み解くことができるだろう。

(2) 現在の「私」と過去の「私」との一致という観点から読む

次に自己語りの観点を確認したい。これについては、「人魚たち」と「それ」の様子が対比的に語られているところを引用する。先の「引用 1」も再掲する。

引用 1

吊されている人魚たちは、それに見向きもせず、日に日に人魚たる自覚を深めていく。柿洪が馴染むにつれて身は縮まり、猿部と鮭部をつなぐ糸はぎゅっと食い込んで境目の処理はますます目立たなくなった。顔は伝説の怪物にふさわしく、厳めしくおぞましく、思索的なものへ変化した。人魚たちは、かつて生きていたころ、力強く身をくねらせ、荒波を尾で叩いて泳ぎまわったことを思い出すまでになっていた。網と鉤を持った人間たちに追い回されたことも思い出した。

引用 5

人魚たちは、選び取った死に満足し、身をやつしてまで神秘を守り抜いたことを誇らしく思った。人魚たちは、仲間とノミを取り合ったこと、きいきい鳴きわめいたこと、草や菌をくいちぎり、果実をしゃぶり、ときには畑から作物を盗んだこと、あるいは冷たい水ごとプランクトンを胃の腑に流し込み、熊の爪をすんでのところで逃れ、必至に川をさかのぼったことなどは、思い出しもしなかった。ましてや捕らえられて鉈

を振り上げられたとき、それがどんなに恐ろしかったか、体の半分を失くして命も失くしてひたすら干されたときの情けなさ、ころもとなさは、人魚としてとうてい認めるわけにはいかない経験だった。そういったことで頭がいっぱいなのは、それだけだった。それの顔は、あくまで不意の死に驚く猿だった。しかも、それのつなぎ目からは、始末の甘い糸がいつそうぼろぼろ顔を出した。

「人魚たち」は、人魚としての自覚が増すにつれ、自身の記憶にも変化が生じるようになる。その変化は第一に「想起」として現れる。「かつて生きていたころ」に海で泳ぎ、人間たちに追ひ回された記憶を思い出すのである。アイデンティティの獲得における自己語りで重要なのは、過去の出来事の「事実性」ではない⁸。現在の人魚としての自覚を保つような「尤もらしい記憶」であれば、自己のアイデンティティを維持するには充分なのである。たとえそれが、虚構のものや改竄されたものであろうとも。

さらに、記憶の変化は第二に猿や鮭であった頃の記憶を「忘却」というかたちで現れる。また、その忘却はかつて猿や鮭として生きていた頃の記憶だけではなく、人魚を作る過程で行われた「暴力」の記憶、そしてその過程の中で感じた「情けなさ、ころもとなさ」といった「情動」の記憶までも忘却するに至るのである。「人魚たち」はそうした忘却があるからこそ、「死を選び取った」と自認し、それに対する「満足」を語るのである。仕立て上げられた自己の物語を脅かすような記憶は、「人魚としてとうてい認めるわけにはいかない経験」として排除される。歴史叙述を考える上では「何が語られたか」ということと同じかそれ以上に、「何が語られなかったか」ということも重要である。無論、自己語りによって紡がれるライフヒストリーにおいても、そうした「語らないこと」の權威性は重要な位置を占めるだろう。

このように、「人魚たち」は「想起」と「忘却」という二つの局面によって、記憶の上で過去の「私」と今の「私」との一致をみる。そのように自己語りの一貫性を得た者は、助六曰く「人魚の死骸としての輝かしい未来」が待っているのである。そうした「人魚たち」に対して、「それ」は猿や鮭の時のままの記憶を有しており、不意の死に驚きを隠せない状態にある。自己語りという点においても、アイデンティティの獲得に成功する「人魚たち」と「それ」は対照的に描かれている。

(3) 「私」と「大いなるもの」との一致という観点から読む

「私」と「大いなるもの」との一致という観点からも、この物語の分析は可能である。「人魚工場」という共同体の中で、「それ」は「人魚たち」という共同体での「成功例」と常に

比較されている。そうした立派な人魚になることを常に助六から期待されているのだが、うまくいかずに助六を失望させ、さらには、その助六の期待を全うできなかった自分に対する失望が描かれる。

引用 6

助六の失望は、それを恐怖でぐしょ濡れにした。恐怖は柿洪の壺より黒く、柿洪とちがって日ごとに乾いたりしない。

「助六、助六」

ある日それは、四つん這いになって板間を拭く助六を呼ばわった。

「なんでえ」助六は、暗い目をちらりと上げた。

「助六、おれはおれは……」それはあえいだ。

「人魚です」

「猿です」

「鮭です」

言い募るのをやめようとしたが、うまくいかなかった。また助六を失望させると思うと、自分自身に対して失望がわき上がった。こういうタイプの失望もまた、猿であり鮭であったときにはありえないものだった。

助六からの期待と失望とを目の当たりにし、「それ」はその後、「人魚」になれなければ「不潔な死骸かただのゴミ」になるかもしれないという恐怖にさいなまれ、「多少人魚らしく」なっていく。ここでは、共同体の中における「あるべき姿」に合わせよという周囲の期待が、「それ」に対して抑圧的に迫る様子がうかがえる。

引用 7

ただし、それはあいかわらず人魚と言ったその乾き切った舌の根で、猿と鮭を名乗ることをやめられなかった。助六はそのたびに顔を曇らせた。それは震え上がった。助六はときにはいら立って罵倒し、ときには妙にやさしく励ましたが、それにとっては同じだった。恐怖は乾くことなく、外からも内からもそれをずくずくにした。

共同体の価値に合わせ「立派な人魚」となれば人魚としてのアイデンティティを獲得することはできるが、猿や鮭であったころの私はなくなる。共同体の価値に合わせず、現状の私を貫けば「不潔な死骸かただのゴミ」となってしまう。つまり、どちらにせよ、「そ

れ」は私の存続は難しいというダブルバインドの状況に置かれているのである。そうしたダブルバインドの状況の中にあっては、助六からの毀誉褒貶はすべて、「それ」にとっては同種の抑圧的なメッセージとなるのである。

4. 総括に代えて

(1) 結末のメッセージについて

「それ」は結局のところ、最後まで「人魚」としてのアイデンティティを獲得できないままに、マイルズに引き取られ、マイルズの死後は、博物館で人々に啓蒙する任を負っている。その博物館で「それ」は来場者の好奇のまなざしにさらされる。

引用 8

それは今でも博物館にいて、ガラスのケースに入れられている。それは大人気というほどではないが、まあまあ人気がある。他の展示物に比べて、それを覗き込んだ客はいやな顔をしたり、少し怯えてみたり、あるいは逆に面白がったりと明らかに表情を変えるのがその証拠だ。たまた、それを目当てに展示室に足を伸ばす客もあらわれる。そういう客は、たいていが若いカップルだ。男の子が女の子を引っ張って来て、女の子が抑えた悲鳴を上げるのを男の子がにやつきながら見守る。反対に、女の子が男の子を引っ張って来て、男の子が気分を悪くして目を逸らすのを、女の子が得意げに見守ることもある。まれに、二人して長いことケースやキャプションを指さしてひそひそと話し合い、丸く見開いた目を近づけてそれを観察していく者もある。

見世物として展示される「それ」、そして、異形のものに対する好奇のまなざし。多くの者が、こうした光景にどこか既視感を覚えるのではないか。おそらくそれは、様々なマイノリティに対する社会のまなざしと一致するのだろう。「それ」の「猿でもなく、鯨でもなく、まして人魚でもない」という状況は、マイノリティがあらゆる社会や文化の見えない制度や価値観に板挟みになりながら、自身を「〇〇でもなく、〇〇でもない」と表現する語法と重なり合うことがある。結末部分も引用しよう。

引用 9

「生きていると、ときに自分の望まない自分の像を押し付けられることがある。また、自分が理想の自分とはまったく違うものに成り果ててしまうこともある。しかし、人生でいちばん大切なのは、ありのままの自分を受け入れてくれるパートナーに出会う

ことだ。そして、自分自身でもありのままの自分を受け入れること。それが死骸であ
れゴミであれ、なんであれ」

「それ」とマイノリティとの類推を考えたとき、稿者には「ありのままの自分を受け入れてくれるパートナー」を見つけ、「自分自身でもありのままの自分を受け入れること」でしか、社会的な位置取りを確保することができないマイノリティの現状を示しているように映るのである。「それ」はそうした声なき声を、「相手が聞いていようが聞いていまいが」来場者に語りかける。この物語を読むことが、「それ」と同じ状況にある人たちを見つめる契機に、また、そうした周縁に押しやられたサバルタンの声をいかに掬い取るかということを考える契機になりはしないか⁹。

(2) 教室で読むことの意義

最後にもう一つ、触れておきたいことがある。それは、この作品が教科書教材であること、つまり、教室で読まれるということである。

作中の「人魚工場／職人／人魚」の関係性は、そのまま容易に「学校／先生／生徒」の関係性に置き換えることが可能であろう。そう考えると、進路選択等の学校生活のあらゆる場面で学習者に「アイデンティティの確立」を迫る授業者が、「アイデンティティの獲得を抑圧する」物語を扱うことは、授業者自身の立ち位置を批判的に検討し、授業者と学習者の関係性を捉えなおす契機にもなり得るのではないだろうか。

付記

本稿は2022年8月11日に広島大学で行われた「第63回 広島大学 国語教育学会」での口頭発表をもとにしている。当日に現役の学生から貴重な提言があったため、ここに記しておきたい。その提言とは、アイデンティティの獲得に際して、友人や恋人等、「身近な者との一致」というバリエーションもあるのではないかという提案である。これは言い換えると、私という個的な存在と別の個的な存在との一致である。

提言の通り、そうした「一致」も考えるべきだと私自身も納得した。恋人関係において互いの生きる意味を互いの存在へと投射するような状況を想像すれば、この提言はより具体性を帯びるだろう。また、2000年代頃から若者言葉として表れた「ズッ友」、「ニコイチ」、「いつメン」、「BBF」等の極めて少数の友人関係を絆づけるような（時には束縛するような）言葉は、「身近な者との一致」という観点がアクチュアルなものであることを証づけるものである。

今回は発表時からの大幅な改稿は行わなかったが、現役学生から得たそうした提言を今後の課題として保持し、引き続き国語教育の中でアイデンティティの問題を扱うことの意味や意義を（それが実際にあるのか／ないのかということも含めて）考えていきたい。

提言いただいた学生を含め、当日にご質問やご意見をいただいた全ての方に対して、この場をお借りして感謝申し上げます。

注

- 1 本稿では「アイデンティティ」、「自己意識」、「自我」を、おおよそ「主観が自身の位置づけ・役割・存在理由などを客観的に捉えている状態」という意味で捉え、三者をほとんど同じものとして用いている。ただしここで言う「客観的に捉えている」ということは、客観的に捉えようと努めてはいるが全てを把握しきれていない未熟な状態も想定できるし、また、まさしく「客観」の視点から完全に把握した状態も想定できるだろうが、ここではその詳細な議論には立ち入らない。
- 2 「アイデンティティ」を考える時、「同一性」と同じくらいに「固有性」が問題とされることが多い。両者の問題は有機的に結びつくものであるが、ここでは「同一性」について焦点を当て、議論を進めたい。
- 3 こうした通時的同一性を「数的同一性」とも呼ぶ。
- 4 法的な主体、帰責性や意志の問題に関して、古田徹也『それは私がしたことなのか 行為の哲学入門』（新曜社、2013）や國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』（医学書院、2017）の中で、興味深い議論が展開されている。
- 5 「反省」を意味する英語「reflexion」の原義は、「反対に折れ返る」である。
- 6 このように考えると、アイデンティティは承認論と無関係ではない。
- 7 本文は藤野可織『おはなしして子ちゃん』（講談社、2013）をもとにした。「アイデンティティ」の初出誌は2013年8月号の『群像』（講談社）である。
- 8 実際に近代国民国家が、その国家アイデンティティを多くの古代神話によって裏付けていたことを考えてみても、アイデンティティを基礎づけるための自己語りにおいて「事実性」が重要なのではないことがわかる。
- 9 加えて、物語の最後まで「それ」という指示代名詞でしか語られないことも注目に値しよう。固有名を与えられず、その結果、社会的に確かな位置取りを与えられない「それ」の姿は、デイヴ・ペルザー『Itと呼ばれた子』をも想起させるものである。

（関西大学第一高等学校・第一中学校）